

ミステリ読書案内

2023. 6. 20 発行元

第489号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

昨年出た本の中から

昨年出版された本の中から4冊を紹介する。今回は普段取り上げていない作家のシリーズものでない作品を選んでみた。世間的にもあまり話題に上がらなかったもの。いずれも出来は今一つかな…。

新型コロナ少しずつ…

5月に入って新型コロナ・ウィルスによる影響が少しずつ治まってきたようである。ここ3年間自粛してきた人ごみの中への旅行をちょっとしてみようかなという気持ちになりつつある。5月初旬、地方の田舎ではまだほとんどの人がマスクを着けている状態だけれども。私にはこの先どうなるかの予測はまったくつかない。このまま完全収束に向かうのなら有難いのだが…。

最近話題になっているのはAI

関連のChatGPTのこと。質問に「文章で回答する」という点で注目している。「学校での使用をどうでしょうか？」も問題になっているようだ。夏休み宿題の「読書感想文」であるならば、AIに書かせたものかどうか見分けがつかないような気がする。普段の生徒の文章力などは十分把握しているから、読めばすぐに違和感を感じると思う。ただ、「これはAIに書かせたものか？」などと問い詰めることはやりたくない。やんわりと全体指導をする程度に収めておくか…。

越尾圭「AIアテナの犯罪捜査」

—昨年の11月に宝島社文庫から出た本。副題としては『警察庁情報通信企画課〈アテナプロジェクト〉』とついている。警察庁が開発に着手した新しいAIを作品の中に取り入れたもの。過去の犯罪のデータや人間の考え方などを徹底的に蓄積させて捜査の方向付けに活用しようと計画されたものである。新宿中央公園でドローンによる爆発事件が起き、現場に犯人からの挑戦状が付けられていた。過去の警察捜査などに対する恨みを晴らすとともに、AIと勝負するというのだ。現場に居合わせた十勝刑事と開発リーダーの穂積警視がパディを組んで犯人逮捕に全力を尽くす。果たしてアテナの活躍はどれほどのものか…。

佐藤友哉「少年探偵には向かない事件」

昨年10月に星海社FICTIONSから出た本。佐藤友哉は2001年にメフィスト賞でデビューした作家だが、私は『クリスマス・テロル』しか読んでことがない。本書には「読者への挑戦」が入っていて、真正面から謎解き本格ミステリに挑んだ作品と言えるだろう。

大財閥である入院家の館・無頼館があるのは薄荷島。一日一便のフェリーだけが交通手段。そこに招待されたのは3人の探偵候補とプラス十歳のすばる君。警察エリートの新井警視、ゲームクリエイターの三九二、ミステリ作家の佐藤友哉。友哉の息子がすばる君。依頼されたのは孫娘の鈴音を守ること。「予告状」が届いていると言うのだ。でも、鈴音は館の隣の塔の頂上から消え失せてしまうことに…。すばる君は名探偵として…。

柘悠羅「不動のセンター」

昨年6月に宝島社文庫から出た本。『このミステリーがすごい！』大賞の隠し玉作品に選ばれたものだという。副題としては『元警察官・鈴城代瀬風』とついている。「センター」はアイドルグループのセンターを意味している。

アイドルグループMy SeLlectionの鈴城代瀬風は元警察官という特殊な経歴の持ち主。途中から方向転換してアイドルをめざしたとのこと。メンバーの一人がプロデューサーから覚醒剤らしきものが入ったお香をもらった疑いが生まれた。瀬風は独自調査を始めるのだが、逆に罠にはめられ、覚醒剤所持で逮捕されてしまう。

翔田寛「油絵は謎をささやく」

—昨年の3月に角川書店から出た本。美術、とりわけ絵画が好きなので手に取ったもの。明治初期の高橋由一の油絵が取り上げられている。ただ、油絵のものよりも、当時の山形県で起きた歴史的事象の分析に力点が置かれている作品だ。

大学で日本文化史の講座を担当している小宮山香織の元にかつての教え子が訪ねてくる。地元に戻って家業の旅館の仕事をしているのだが、その家に保存されていた高橋由一の油絵を博物館に買い上げてもらおうとしたところ、「贋作ではないか」との疑義が持ち上がり、公聴会が開かれる事態になってしまったという。絵の題材は明治初期の山形・天童と仙台を結ぶ関山隧道工事に関するもの。香織は現地へ赴き、教え子を助けようと決心する。ここから当時起きた豪農の次女が行方不明になった事件と、関山の神域を通る隧道工事に反対する地元民の一揆の話に中心が移っていく。残された日記や関係者の記憶などが調査されて…。最後には「贋作ではないか」といっていた美術家が……となる。